

令和7年度長浜市総合教育会議議事要点録

I 日 時 令和8年1月29日(木曜日)14時55分～16時45分

II 場 所 長浜市役所浅井分庁舎3階大会議室・浅井中学校分教室

III 出席者 【構成員】

浅見 宣義 市長 織田 恭淳 教育長
前田 康一 委員 兼子 貴絵 委員 前川 加奈子 委員
押谷 喜美子 委員 上田 祐樹 委員

【事務局】 (教育委員会事務局)

大音教育部長、馬淵教育委員会事務局次長、
藤田教育総務課長、成田教育改革推進課長、
細江教育指導課長、杉本教育センター所長、
塩津学校給食課長、森幼児課長、
天野教育センター教育相談室長、大比叡教育指導課主幹

(未来創造部)

和田本未来創造部長、為永未来創造部次長、
手崎政策デザイン課長、岸田政策デザイン課長代理、
山崎政策デザイン課係長、野村政策デザイン課主査、
中村政策デザイン課主査

IV 内 容

1 開会

2 市長挨拶

挨拶 本日の意見交換のテーマは「学びの多様化学校について」である。

近年、社会や家庭環境の変化により、子どもたちの課題が多様化し、不登校を経験する児童生徒の割合が増加している。こうした状況に対応するため、すべての子どもたちに「誰一人取り残さない教育」を提供することが重要である。本市ではその一環として「学びの多様化学校」を設置し、不登校児童生徒に配慮した特別な教育課程を編成している。滋賀県で初めての設置であり、全国でもまだ設置のない都道府県もある中で、非常に嬉しいことである。ぜひ県とも一緒になって進めていきたい。

学びの多様化学校では、ゆとりある始業時間や個別対応可能なカリキュラムを提供しており、例えば起立性調節障害を抱える生徒も通学しやすい仕組みを整えている。クラスに行くとなかなか立ち回る子などもいて先生方は大変だと思うが、そういう部分も対応できるように取り組んでいる。また、地域社会との連携・交流の機会を通じ、生徒たちが未来に向かって歩む基盤を築いている。

本市の教育振興基本計画でも、「子ども一人ひとりに応じた多様な学びの場や居場所の確保」を掲げており、地域全体で子どもたちを支える仕組みを充実させることが重要である。

今回の会議では、この「学びの多様化学校」事業を最大限活用するための課題や、今後の対応・体制はどうあるべきかについて考えたい。よろしく願います。

3 意見交換

テーマ:「学びの多様化学校について」

行政説明 ・学びの多様化学校の目的と概要、特色

(教育指導課) ・教育課程

・入室までの流れ

・これまでの経過や現在の進捗状況 などについて説明

学びの多様化学校(浅井中学校分教室)現地視察

意見交換 説明や現地視察を踏まえて、学びの多様化学校についてどうあるべきか等

委員

「学びの多様化学校」は不登校の子どもだけを対象とした教育でなく、すべての子ども一人ひとりの可能性を引き出し、未来に向かって主体的に考え、問題を解決する力をつけるという視点を持つべきだと考える。大事なのがカリキュラムマネジメントであり、カリキュラムを作る力量を教師がどうやって磨くのが一番の課題となる。入室してくる子どもたち一人ひとりの状態を見て、カリキュラムを作らなければならない、簡単なことではない。子どもの強みを伸ばす力量だけでなく、教科の力量も持った教師が必要である。教科の時間もある程度確保しないといけないが、子どもの得意を分析し伸ばす時間をどこに充てられるのか、子どもの可能性を發揮できる場をいかに作れるのか、難しいところである。

これから求められる教育であることは間違いない。他の学校の先生も同じように学びを得ることが重要である。教職員研修を実施して教員にも力をつけてほしいし、予算もつけてほしい。

事務局

文科省にカリキュラムを提出し、差し戻しがあったが、どのような観点で差し戻しがあったのか共有する。実技教科を0時間にする場合、新設教科で補完する必要があり、差し戻しがあった。

中学校の標準時間は1015時間であるが、学びの多様化学校の年間時数は875時間となっている。学習課程で9教科すべてを補完できていないといけないが、技術や家庭、音楽等の実技教科は年間時数に含まれていないため、探究ラボの時間に含めることを説明していかないと認めていただけない。

学びの多様化学校は特設教科が特徴で、柔軟なカリキュラムを組めるが、教員の力量が必要になってくる場所である。県には教職員を5名配置してほしいとお願いしているが、県下初の事業のため、教職員自身もイメージできているか

といわれるとまだそこまで至ってはいない。

市長 難しいが、やりがいのある事業ではある。将来的には他の学校にも広めていく構想はあるのか。

事務局 全教職員を伸ばしていかないと、というのが我々の課題である。通常の学校の教育課程に取り入れるのは難しいが、教職員にこれから求められている力ということは認識している。

委員 時間の弾力化は国の指針としてすでに示されているので、申請すれば教育課程に取り入れられる。探究学習をどれだけ積極的に進めるか、時間の采配が難しいところではあるが。

教育長 先進事例では、授業はどう進めているのか。

事務局 岐阜県北方町の事例では、理科の授業の一環でロケットを飛ばす探究学習をされていた。他には、北方町のマンホールを子どもたちでデザインすることをやっておられると聞いた。教職員は、教えるというよりは伴走するような形で取り組んでいる。教職員自身も、カリキュラムそのものを探究しているところである。

委員 教職員だけでは難しいとなったときに、外部から専門の人を呼ぶための予算等があると補えるのではないかと思うが、いかがか。

事務局 予算は少ないが、社会と繋がることは子どもたちにとっては大きなことであり、必要なことである。たとえば、自分たちでお米を収穫して地域で売るという学習を行ったときに、お米の袋のデザインなら美術の学習になるし、どうすれば利益がでるかを考えればまた違う教科の学習になる。学習指導要領と一致しているかどうかという点は、教師が軌道修正する力がないといけない。外部とのネットワークも必要となってくる。

教育長 ボランティアの先生に授業をしてもらうことは問題ないか。

事務局 特別講師ということであれば問題ない。

委員 教員だけの世界でなく、社会との繋がりを持っている行政の視点から人選してくれれば、より質の高い教育ができる。市と教育委員会が意見を交わすせっかくの場なので、検討していただけるとありがたい。

委員 音楽という教科は、一見すると音符が読めないといけない、何かができないといけないと思われがちだが、実は総合学習的な要素が多い。たとえば、歌詞は国語、音符や和声学は数学に近い要素を持っているし、音楽史は歴史とも近い。教え方によってどの教科にも繋げていくことができる。音楽の分野を知る人以外にも広げていければと思っているし、多様化学校のカリキュラムにもフィットするよう感じた。

地場産業もぜひ多様化学校に取り入れてほしい。地域ベンチャー留学という取組があり、創業者を目指す大学生を全国から集めて長浜市に1か月住みこんで創業に取り組んでもらうというものである。その取組の中で、地場産業の教育教材を作るという名目で募集をかけたところ、数名応募があった。そのような、ここでしかできないことをカリキュラムで広げていけるとよいのではないかと。多様化学校の中でやれることは多いのではないかと思う。

委員 医療の立場から見ると不登校の理由はそれぞれで、実際は学習が遅れているわけではなく、理由はわからないが行けなくなってしまった子もいる。そういう子に学習の場を提供できる選択肢があるのはいいことだと思う。課題となってくるのは受け皿で、多彩な個性を持った子どもたちに対して、足りないところを補いながらいかに伸ばしていくか、教育スタイルをどうするかということである。先進地では教職員の特性に頼った教育になっているのではないかという気がする。教育を一般化しつつ、教職員がアレンジを加えられる能力を身につけられればよいのではないかと思う。先を走るのであれば、先生の特性に頼るのではなく、一般化した考え方を身につける策を考えた方がよい。

委員 長浜市でも、学力向上プロジェクトチームを作り、一般化しようと「長浜スタイル」を作った。長浜スタイルを一般化の仕様として、そこから学校の実態に応じて学びのスタイルを変えていくものであり、求めるものは主体的な学びである。施行したが、一般化のスタイルが独り歩きしてしまい、一人ひとりの学びの保証が忘れられている。学びの多様化学校も同じように、モデルの教育課程に囚われてしまうのではないかと懸念する。一般化というのは教育の場では難しく、また社会に開かれたという視点をどう取り入れるのかが課題となる。

市長 教育に限らず、物事がパターン化して本来の趣旨を見失うというのはよくあることである。常に成長していくような仕組み。長浜スタイルを施行し、以前よりも子どもたちが自主的に学ぶようになってきた。学びの多様化学校でも、やりたいという先生にぜひ力を発揮していただきたい。この学びの多様化学校で、長浜市に先進的な役割ができる。

事務局 学びの多様化学校の募集生徒の中には、医療にかかっている子も何人かいる。医療や特別支援の現場とも連携・協力し、学びの多様化学校を医療から勧めていただくことも一つの手段として進めていきたい。

委員 医療側には教育の受け皿に関する情報がなく、どこに相談すればよいのか悩むことがある。教育機関と接し、情報を入れていただく機会があると、医療側もありがたい。

委員 実際に学びの多様化学校を見せていただき、希望を感じた。期待を裏切らない場所になってほしい。

学びの多様化学校には、やりたいという気持ちを持った先生にいてほしいと

思う。子どもと一緒に新しい未来を築いていける場だと思う。また、いつ不登校になるか、どの子どもにもありうることなので、すべての子のお手本になる場になるのではないかと思いながら聞いていた。

市長 小児精神科では音楽が流れているところが多い。学びの多様化学校でも、音楽を流すのもよいのではないか。

事務局 教室の見学初日は、子どもたちが緊張していて静かで空気が張り詰めていたので、音楽を流したところ、そこから少し空気が和んだ。入室体験では、最初から音楽を流した。基本はヒーリング音楽になるが、教室に来た子どもたちと一緒に考えることも授業の一環として考えていきたい。

学びの多様化学校の名前やデザインも、これから授業の一環として子どもたちと一緒に考えていけると、愛着にも繋がるのではないかと考えている。先進事例では部屋の名前や看板まで、すべて子どもたちと考えるおられた。先進事例も取り入れながら進めていきたい。

委員 愛着が湧いてきた頃に、校歌もぜひ作っていただきたい。

養護学校では最初に必ず医療機関と結ばなければならず、医療機関との連携のためのプログラムがきっちり決まっている。その辺りも参考になるのではないかと思う。

教育長 熱心な協議に感謝する。新しい取組ということで私自身も不安を持っていたが、課員ががんばってくれた。また、不登校の子をなんとかするというより、夢を作っていくという明るい思いで受け止めていただいているのだと感じた。

入室を希望する子どもの保護者の中には、私の叱り方が悪かったのかと自分を責められる方もいる。子どもの受け皿としてももちろんだが、親や家族、教育と福祉、みんなを丸ごと何とかしていくという気概がないと、課題は解決していかない。カウンセラーやソーシャルワーカー等とも連携しながら進めていきたいと思う。市全体で家族みんなを支えていけるようお願いしたい。

4 その他

事務局 今年度の総合教育会議はこれで終了。

5 閉会

以上